

奥城寺遺跡発掘調査報告

2009（平成21）年2月
三重県埋蔵文化財センター

序

伊賀地域は、古来より都から東国へ繋がる重要な場所であったと考えられます。古墳時代においては、県内最大の前方後円墳である御墓山古墳をはじめ、石山古墳・美旗古墳群といった大型の古墳が築造されていることからも、往時の繁栄が窺えます。

今回報告する奥城寺遺跡は、伊賀地域でも比土地区に所在します。大溝祭祀遺構が発見された城之越遺跡は木津川をはさんで対岸に位置します。また、奥城寺遺跡から北上した木津川の右岸には、壬申の乱に際して大海人皇子の勅願で建立されたとされる財良寺や、中世において天正伊賀の乱の契機となった丸山城もあり、歴史的に重要な地域であったと言えるでしょう。

今回、県道工事がこの地で行われることになり、木津川を渡る新たな道路が開かれることになります。これに先立って行いました奥城寺遺跡の発掘調査では、木津川の氾濫の影響を感じさせる流路跡や、弥生時代から近世に至るまで多岐にわたる遺物を確認することができました。周辺に住んでいた人々は、木津川の流れとともに、この地域を見守ってきたことでしょう。

奥城寺遺跡は道路建設により姿を消す部分もありますが、この発掘調査の成果が地域史把握の一助となり、資料の活用を通して、少しでも伊賀の歴史を広く知っていただくことにつながれば幸いです。

平成21年2月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫

例　　言

- 1 本書は三重県伊賀市上神戸に所在する奥城寺遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は平成19年度道路改築事業（主）上野名張線（古郡～上神戸）に伴って行われ、調査にかかる費用は三重県県土整備部が負担した。
- 3 発掘調査は次の体制により実施した。

　　調査主体 三重県教育委員会
　　調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究I課
　　　　主幹 長谷川哲也
　　　　主事 前野 謙一
　　　　臨時技術補助員 川崎 志乃
　　調査受託者 大成エンジニアリング株式会社（平成19年度）
　　面 積 2.210m²
　　期 間 平成19年11月13日～平成20年1月18日

- 4 本書の編集は長谷川哲也・小濱学・前野謙一が行った。各部の執筆者は目次および本文末尾に記した。
- 5 本書に掲載した遺構写真の撮影は、調査受託機関が行い、遺物写真の撮影は長谷川・前野が行った。
- 6 現地における発掘作業や整理作業、そして本報告書の作成にあたっては、伊賀市教育委員会福田典明氏にご協力をいただいた。記して感謝いたしたい。
- 7 奥城寺遺跡に関わる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。

凡　　例

- 1 本書では、国土地理院発行の1:25,000地形図「伊勢路」、「阿保」などの地図類を用いている。
- 2 本書の遺構図面は、日本測地系による国土調査法（旧国土地標）の第VI座標系を基準とする座標を用いた。方位についてはそれを基準とする座標北を用いた。なお、磁北方位は、西偏6°50'、真北方位は、西偏0°18'である。

〈遺構類〉

- 1 土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄（編）2002『新版標準土色帖』（21版）日本色研事業株式会社を用いた。
- 2 本書では、以下のように遺構の略記号表記をしている。
SD：溝・流路、SK：土坑

〈遺物〉

- 1 遺物実測図の縮尺は1/4を基本としている。縮尺は図中スケールにて明示している。
- 2 当報告書での用語は「つき」は杯、「つぼ」は壺、「わん」は椀に統一している。
- 3 出土遺物観察表は、以下の要領で記載している。
番号 ······出土遺物実測図掲載番号である。
実測番号 ······実測段階の登録番号である。
出土遺構（出土位置）···遺物の出土した遺構や層名などを記した。
種別 ······「土師器」「須恵器」などの区分をここに示した。
器種 ······遺物の器種を示した。
法量（cm） ······遺物の法量を示す。数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での接地点ではない。
胎土 ······小石などの混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。
色調 ······その遺物の代表となる色調を記載した。表記は前掲『新版標準土色帖』による。
残存率 ······その部位を12分割した際の残存率を示した。6/12は約半分を示す。
備考 ······遺物の特徴となる事項を記した。

〈写真図版〉

- 1 写真図版は、遺構・遺物毎でまとめた。
- 2 写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告番号と対応している。なお、遺物写真的縮尺は不同である。

目 次

I	前 言	(長谷川)	1
1	調査に至る経過		1
2	調査の経過		1
3	調査の記録と方法		2
II	位置と環境	(長谷川)	4
1	地理的環境		4
2	歴史的環境		4
III	遺 構	(長谷川)	9
1	基本層序		9
2	中世の遺構		9
IV	遺 物	(前 野)	16
V	結 語	(前 野)	20
1	古墳時代の遺物について		20
2	中・近世の遺物について		20
3	S D 1 の埋没期について		20
4	S K 2 と周辺遺跡の中世墓		20
5	中世の遺構について		22

挿 図 目 次

第1図	調査区位置図	3
第2図	遺跡位置図	6
第3図	奥城寺遺跡周辺地形図	7
第4図	遺構平面図	10
第5図	調査区北・西壁土層断面図	11
第6図	調査区トレンチ土層断面図	12
第7図	S D 1 平面図・断面図	13
第8図	S K 2・3・6・7・8・9 平面図・断面図	14
第9図	S D 4・5・10 平面図・断面図	15
第10図	出土遺物実測図	17
第11図	周辺遺跡検出中世墓例	21

挿 表 目 次

第1表	範囲確認調査結果一覧表	3
第2表	遺構一覧表	12
第3表	遺物観察表	19
第4表	奥城寺遺跡周辺の中世墓	21

写真図版目次

写真図版1	調査区全景、S D 1	25
写真図版2	S K 2、S K 2 挖込完掘状況	26
写真図版3	S K 6 完掘状況、S K 7・8・9 完掘状況	27
写真図版4	S D 10 完掘状況、作業風景、S D 4 完掘状況、トレンチ2 挖削状況、 トレンチ4 挖削状況	28
写真図版5	調査区全景、現在の奥城寺遺跡	29
写真図版6	出土遺物①	30
写真図版7	出土遺物②	31
写真図版8	出土遺物③	32

I 前 言

1 調査に至る経過

奥城寺遺跡は、木津川上流部左岸の段丘上及びその南東部に広がる伊賀市遺跡番号a684の周知の遺跡である。平成19年度に三重県県土整備部伊賀建設事務所が、道路改築事業の一環として、伊賀市上神戸から古都間にバイパス工事を計画した。この計画路線内に奥城寺遺跡が所在していることから、埋蔵文化財センターとの協議が始められた。初めに遺跡の範囲を確認するため、平成18年度に範囲確認調査を実施した。事業対象予定地6,600m²のうち118.7m²について、14箇所の調査坑を設けて行った結果、溝2条が検出され、土師器・須恵器等の遺物が確認された。埋蔵文化財センターは、この結果から、範囲確認調査実施範囲のうち、2210m²について、工事施工にあたっては保護措置が必要であると判断した。これを受けて県土整備部伊賀建設事務所と保護措置について協議を重ね、平成19年度に本発掘調査を実施し、記録保存することとなった。

なお、発掘調査の体制については、発掘調査を民間調査機関（大成エンジニアリング株式会社）に委託し、県職員の監督のもと、発掘調査を進める方式を導入して、業務の円滑化を図った。

2 調査の経過

（1）調査経過概要

調査期間は平成19年11月13日～平成20年1月18日である。調査区は、土地の高低によって南側の荒蕪地と北側の水田の2つに大きく分かれていた。

重機による南側の荒蕪地の表土・旧耕作土の除去から開始した。当初は範囲確認調査結果から、表土直下60cmを遺構検出面と想定していた。しかし、遺構は確認できず、遺物も少なかったため、再度の土層観察から、遺構検出面をさらに40cm下へと変更し、重機で掘削していく。すると、古墳時代以降の高壙・壇・甕や中世の瓦器碗・土釜など土器破片が出土した。その後、人力によって精査した結果、流路1条が検出された。流路は、途中で2筋に分かれて

中州を形成し再び合流して1筋になっていた。流路の底を確認するため、トレンチ1として深さ1.5m程の人力掘削を行った。しかし流路埋土は砂層で壁面崩落の危険性が高く、湧水も発生したことから掘削を中止し埋め戻したため、底は確認できなかった。以上のことをふまえ、流路は遺構全体を10cm程度掘削するにとどめた。

北側の水田においては、重機による掘削に入る前に、土層堆積状況を把握するため、東西壁面に沿って計7箇所、30cm角の試掘を行った。結果、遺構検出面と想定される深度まで東壁側60cm程度・西壁側70cm程度と確認した。重機による掘削中に、中世の瓦器碗・土釜・輪羽口の小片・土製品の小塊・砾石などが出土した。また遺構としては、溝3条・土坑6基が検出され、人力による掘削を行った。検出された遺構からは少量ではあるが中世の遺物が出土した。しかし小片が多かったため詳細な時期を特定するまでには至らなかった。

以上のような成果をあげ、現地調査は終了した。

なお、現地作業にあたっては、寒風吹きすさぶ中、比土地区の方々の協力を得た。心から感謝したい。

（2）調査日誌（抄）

2007年

11月12日 調査区現況地盤段階確認

11月14日 調査前状況写真撮影

重機による調査区南側の荒蕪地表土除去

開始

古墳時代前期の土器出土

11月20日 調査区南側の荒蕪地でSD1検出

11月26日 調査区南側の荒蕪地表土除去終了

調査区北側の水田表土除去開始

11月27日 調査区南側の荒蕪地段階確認

11月29日 SD1人力掘削開始

調査区北側の水田で集石遺構・土坑・溝検出

11月30日 集石遺構写真撮影

1/10遺構実測図作成

12月4日 SD1人力掘削終了

- 調査区北側の水田表土除去終了
- 12月5日 調査区北側の水田段階確認
集石遺構掘り下げ、断面状況写真撮影
- 12月12日 調査区北側の水田遺構掘削開始
遺構写真撮影・遺構実測図作成
- 12月14日 遺構写真撮影・遺構実測図作成
- 12月19日 調査区全景写真撮影
- 12月26日 調査区南側の荒蕪地及び北側の水田の人力掘削段階確認
- 2008年
- 1月8日 下層遺構確認
- 1月18日 発掘調査終了
- (3) 文化財保護法等に関する諸手続
- 文化財保護法（昭和25年法律第214号）および三重県文化財保護条例（昭和32年条例第72号）にかかる諸手続は以下のとおりである。
- 三重県埋蔵文化財保護条例第48条第1項
・平成19年10月19日付 賀建第481号
三重県知事から三重県教育委員会教育長あて
「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の通知書」
- 三重県埋蔵文化財保護条例第48条第2項
・平成19年10月19日付 教委第12-2-56号
三重県教育委員会教育長から三重県知事あて
「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」
・平成19年10月19日付 教委第12-2-56号
三重県教育委員会教育長から三重県埋蔵文化財センター所長あて
「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」
- 文化財保護法99条第1項
・平成19年10月29日付 教理第252号
三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて
「埋蔵文化財文化財発掘調査の報告について」
- 文化財保護法第100条第2項
・平成20年2月18日付 教委第12-4-29号
三重県教育委員会教育長から伊賀警察署長あて
「埋蔵文化財の発見・認定について（通知）」

3 調査と記録の方法

(1) 掘削の方法

遺構が検出できる面まで重機掘削を行った。その後、人力により遺構検出・遺構掘削を行った。若干であるが、遺構検出面に遺物を含んでいたことから、下層遺構の存在が疑われたため、再度重機掘削を行い、その後人力による遺構検出および掘削を行った。

(2) 地区設定

調査区内は、4 m四方の升目で区切ることによって小地区（グリッド）を設定している。北西隅をそのグリッド名とし、北からアルファベットの大文字から小文字へ、西から数字を付与している。なお、この地区設定は任意のものであり、国土座標とは合致しない。

(3) 遺構カード・遺構略測図

遺構カードは、遺構検出後、掘削するまでに記入し、遺構の重複関係、埋土の色調・状態などを明示している。遺構番号については、溝・土坑などについては遺跡全体の通し番号とした。但し、本発掘調査においては、遺構密度が低かったため、調査区枠と遺構及びそれに関係する箇所のみ作成した。また、この遺構カードをもとにして1/100の略測図を作成した。

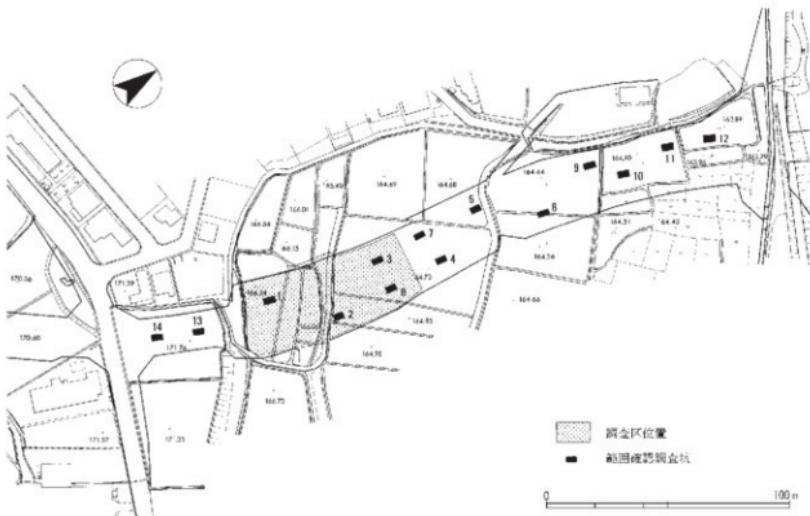
(4) 遺構図

調査区の平面図は、遺構密度が低かったため、1/50で手書き実測を行った。また、SK2は1/10で、SD1・SK2以外の遺構土層断面図は1/20で作成した。また、北・西壁土層断面図は1/20で、トレングル2・3・4土層断面図は1/50で作成した。

(5) 遺構写真

遺構関連の写真は、重要なものを4×5版で撮影し、補助・メモ的に35mm版を使用した。それぞれのフィルムは、基本的に白黒とリバーサルを同時に作成している。

（長谷川哲也）



第1図 調査区位置図 (1:2,000)

範囲確認 調査坑No	遺物包含層 上面の深さ (cm)	遺構上面の深さ (cm)	遺構	遺物	備考
1	40~50	76	溝	—	断面に土器片・炭化物入る
2	35	55	—	—	断面に土器片・炭化物入る
3	40	65~68	溝	土師器片 須恵器片	断面に土器片・炭化物入る
4	50~52	70~75	—	—	断面に土器片・炭化物入る
5	—	—	—	—	
6	—	—	—	—	
7	—	—	—	—	
8	—	—	—	—	
9	—	—	—	土師器片	自然地形
10	—	—	—	—	
11	—	—	—	須恵器片	
12	—	—	—	—	
13	55~60	—	—	土師器片 須恵器片	
14	50~55	—	—	—	

第1表 範圍確認調査結果一覧表

II 位置と環境

1 地理的環境

地形 奥城寺遺跡は、三重県伊賀市比土に所在する⁽¹⁾。伊賀市は、平成16年11月1日に、旧上野市・旧伊賀町・旧島ヶ原村・旧阿山町・旧大山田村・旧青山町の1市3町2村が合併して誕生した。伊賀市は三重県の北西部に位置し、北は滋賀県、西は京都府、奈良県と接している。地形は北東部を鈴鹿山系、南西部は大和高原、南東部を布引山系に囲まれた盆地を形成しており、低地・台地は少なく、丘陵地が多くなっている。この丘陵地は、約400万年前に古琵琶湖の陸化によって形成されたものである。地勢及び水系の違いによって、名張川水系の名張盆地と、木津・服部・柘植川水系の北部の上野盆地に分けることができる。上野盆地は、独立丘陵や低丘陵、台地によってさらにいくつかの小盆地に分かれている。木津川上流部から阿保・比土・下神戸盆地と続き、その後は上野盆地中央部の沖積地が続く。奥城寺遺跡の所在する比土地区の集落は、木津川を挟んで両側に所在している。今回の調査地は、木津川左岸側の比土集落と河岸段丘上にある朝日ヶ丘団地の挟間に位置している。調査地の南側からは山が迫っており、東側と北側は微高地、西側は丘陵地となっている。このような地形から調査地は周囲よりも低く、主に水田として土地利用がなされている。

交通 調査地の南東約15kmには、古代から近世にかけて初瀬表街道が通じていた。初瀬街道は大阪を起点にして、奈良県桜井市を経て旧猿原町（宇陀市）で二つに分かれる。東南に向かって飼坂峠・櫃坂峠（津市美杉町）を越えて梯田川のほとりに出る道を初瀬本街道というのに対し、東北に向かって旧室生村（宇陀市）を経て、名張市、旧青山町（伊賀市）を過ぎ、津市に入り、旧白山町二本木や旧一志町田尻・八太を経て、松阪市六軒町で伊勢参宮街道に合流する道を初瀬表街道と称する。後者の初瀬表街道は山坂が少ないため、古代から最もよく利用されていたと考えられる。現在の国道165号線や近鉄大阪線は、ほぼこの街道に沿っており、交通量が多い。このほ

か、国道165号線から分かれて伊賀市中心部へ抜ける道として県道422号線がある。この道の両側に多くの遺跡が点在している。また、交通量が多い。

2 歴史的環境

奥城寺遺跡（A）は、木津川上流部左岸の段丘上及び南東部に広がる遺跡である。昭和47年の住宅団地造成工事に伴って、段丘上的一部が発掘調査された。その結果、古墳や住居跡、建物跡が検出され、縄文時代から中世に至る複合遺跡であることがわかった。以下、縄文時代から中世にかけての奥城寺遺跡周辺の様子について、概観してみることにする⁽²⁾。旧石器・縄文時代 約25,000年前に、九州の姶良火山が爆発し、日本列島の大部分が火山灰に覆われた。それは姶良Tn（AT）火山灰といわれるものである。本調査地のすぐ南方向に所在する比土遺跡（23）から、この姶良Tn（AT）火山灰と翼状剥片が出土している。

縄文時代の遺物が出土する遺跡は、主に柘植川・木津川沿いの丘陵や河岸段丘上に所在する。その中で、田中遺跡（4）では、縄文時代前期後半に属する土器や石器が多数出土している。表面に羽状の縄文や爪形文を施す近畿系の土器群である。中期前半期の遺跡としては、久米山林支群1号墳（1）下層や桶之谷遺跡（2）であり、住居跡が検出されている。また、晩期前半期の森脇遺跡（3）では、多数の貯蔵穴が確認されている。それは足場を伴うもので、また、屋根上の蓋があり、トチやカシなどを貯蔵していたことがわかっている。

弥生時代 前期の遺跡としては、奥城寺遺跡や比土遺跡があげられ、遠賀川系土器が出土している。中期より定住生活を示す堅穴住居や方形周溝墓が見られようになった。森脇遺跡（3）では、隅丸方形の堅穴住居が検出されている。後期になると、石包丁・磨製石斧などの石器や平鐵・田下駄などの木製品が多く出土し、稻作文化の発達を窺うことができる。田中遺跡では、壺・甕・高杯・器台・石包丁が出土している。才良遺跡（6）の溝からは、壺・

壺・高杯・器台などが多数出土している。浮田遺跡（9）は、後期から鎌倉時代にかけて断続的に営まれた集落跡であり、4基の方形周溝墓が検出されている。古墳時代 伊賀においても、古墳が数多く築造されているが、奥城寺遺跡周辺でもいくつか検出されている。木津川左岸では、まず、奥城寺遺跡内の奥城寺1号墳（18）と2号墳（19）である。1号墳は現朝日ヶ丘団地の中央部よりやや北寄りに所在した。それは竪穴系横口式石室の流れをくむ埋葬施設を持つもので、後期に築造された径10m前後の小円墳である。そこからは数多くの須恵器や鉄製品が出土している。2号墳は団地中央部に所在した。発掘調査時（昭和47年）には、破壊が著しく石室の基底石が残るのみであった。また、副葬品の大半は失われていた。後期に一号墳に統いて築造された径10m前後の小円墳である⁽³⁾。奥城寺遺跡の北西500m、上神戸地区には近代古墳（14）がある。主軸をほぼ東西にとる帆立貝形古墳で、中期に築造されたと推測されている。副葬品としては、甲冑・鉄刀・鉄劍などの鉄製品や須恵器の杯蓋・高杯脚・土師器の高杯・榠などの土器が多数出土している。一方、木津川右岸では、古郡地区に大師山古墳群（13）、城之越遺跡（17）のすぐ北に南山ノ奥6号墳（16）、比土地区に来迎寺古墳（22）が所在する。奥城寺遺跡周辺の古墳は近代古墳を除いて規模は小さい。また、時期はいずれも中期から後期に属する。

集落については、弥生時代から連続的にあるいは断続的に継続していたと考えられる。高賀遺跡（10）では、前期から中期にかけての大溝から扉板等の掘立柱建物材が出土し、周辺に掘立柱建物を有する首長層の存在が想定されている。高瀬遺跡（24）では、中期後半の溝が50mにわたって検出され、その溝で画された内側で住居跡が検出されている。さらに水の祭祀に関わる遺跡として城之越遺跡がある。ここでも中期の大型掘立柱建物が4棟検出されている。

古代 奥城寺遺跡周辺は伊賀国4郡（阿詳郡、山田郡、伊賀郡、名張郡）の内の伊賀郡に属する。前述のように飛鳥の都から伊勢神宮に至る初瀬表街道は、奥城寺遺跡の南東約1.5kmのところ、阿保地区を通っていた。なお、この街道の支道として国府・国分寺

が所在した伊賀市北部から依那具・才良の両地区を経て、阿保地区で合流する古い道が存在していた⁽⁴⁾。比土地区から阿保地区にかけては、2つの重要な道が交わる要衝の地であり、人々の生活と道との関係は密接であったことが窺える。以下、道に関する史実について記述してみる。

西暦672年、吉野を脱出した大海人皇子（後の天武天皇）は、伊賀国から伊勢国を抜けて美濃国に入り、大友皇子の近江朝を倒して政権を握った。古代史上最大の内乱と言われる壬申の乱である。日本書紀によると、「乱の当初、大海人皇子は名張と伊賀の駅家を焼き、「伊賀の中山」に至り、「萩萩野」で朝食をとり、「積殖（柘植）」に向かった」と、記述されている。伊賀国内をどのように通り抜けていったか、詳細な道筋は明らかになっていない。しかし、吉野から伊賀国に至り、伊賀国内のいずれかの地点で針路を北にとったと推測できる。行軍ルートの関連施設として伊賀の駅家、評（郡衙の前身）そして、創建に天武天皇が関与したと言われる財良寺があげられる。伊賀駅家の候補地の1つとして、奥城寺遺跡北東約4kmの木津川左岸沖積地にある古郡地区があげられる。その古郡地区の北方に下郡遺跡（5）があり、奈良・平安時代の井戸から「延暦」と墨書きされた木簡が見つかっており、伊賀郡衙の比定地を考える上で有力な手がかりとなっている。郡がつく地名は南から「古郡」「上郡」「下郡」であり、財良寺跡は「古郡」と「上郡」の中間に位置する。財良寺創建と考え合わせると、壬申の乱に際して、南の勢力は大海人皇子に協力せずに衰退していく、かわって協力した北中部の勢力は隆盛していったものと考えられる。このため、伊賀郡衙も南部の「古郡」から中部の「上郡」「下郡」に移ったのではないかと推定されている。

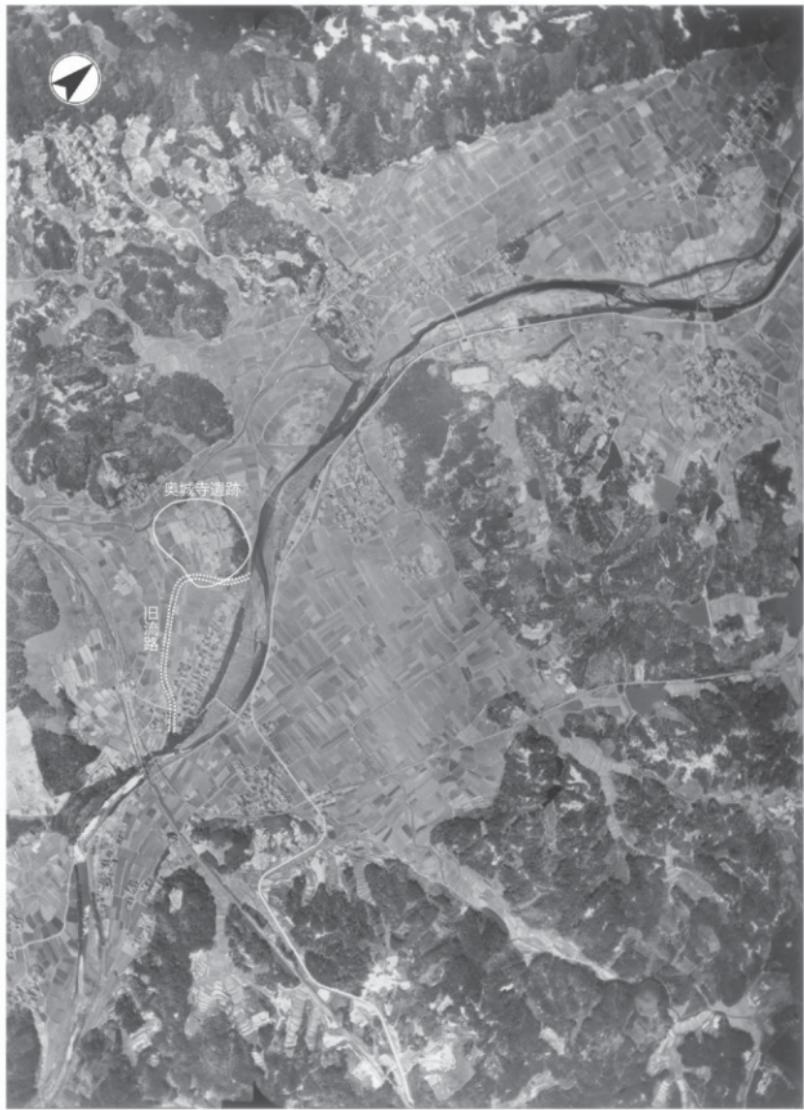
時代が少し下って、天平12年（740）、聖武天皇が伊勢国へ行幸した際にも、阿保地区が所在する南伊賀の道を通ったとされており、阿保頤宮（伊賀市青山町阿保）で一泊している。

以上の歴史背景にあたる時代の集落遺跡として、馬場西遺跡（8）では、飛鳥時代の竪穴住居が検出され、須恵器の蓋と杯などが出土している。高賀遺跡では、飛鳥時代から奈良時代前期の竪穴住居と掘



A 奥坂寺遺跡	7 丸山城跡	14 近代古墳	21 山之下城跡	28 天童山古墳群
1 久米門林支群 1号墳	8 馬場西遺跡	15 占郡氏館跡	22 桑迎寺古墳	29 諸田神社古墳群
2 種之谷遺跡	9 浮庄遺跡	16 南山ノ奥 6号墳	23 比土遺跡	30 三石代遺跡
3 森脇遺跡	10 高質遺跡	17 坡之越遺跡	24 高瀬遺跡	31 西方寺中世墓群
4 田山遺跡	11 我山城跡	18 奥城守 1号墳	25 森寺遺跡	32 稲田遺跡
5 下郡遺跡	12 鬼山城跡	19 奥城守 2号墳	26 原ヶ野遺跡	
6 才良遺跡	13 大師山古墳群	20 恩常寺城跡	27 谷遺跡	

第2図 遺跡位置図 (1:50,000) [国土地理院「伊勢路」「阿保」(1:25,000) より]



第3図 奥城寺遺跡周辺地形図（約1:7,700）〔昭和23年米軍撮影航空写真より作成〕

立柱建物群が検出され、円面鏡や須恵器杯の細片（墨書きつき）が出土している。城之越遺跡では、9棟の掘立柱建物（1棟が飛鳥時代、8棟は奈良時代前期）と、7棟の堅穴住居（飛鳥時代から奈良時代前期）が検出された。比土遺跡では、奈良時代中期の堅穴住居4棟・掘立柱建物16棟が検出された。奥城寺遺跡では、飛鳥時代から奈良時代の堅穴住居4棟と掘立柱建物が検出され、須恵器杯・杯蓋・長胴瓶などが出土している⁽⁵⁾。

平安時代に入ると、莊園化が進み、10世紀後半から11世紀にかけては、古都に拠点を置いたと考えられる藤原清廉・実遠親子がこの地域の大部分を私営田としていた。その後、多くは伊勢神宮領となつた。馬場西遺跡では、12世紀後半から13世紀前半の掘立柱建物が検出された。

中世 篠倉時代末に「悪党」と呼ばれる在地勢力は、南北朝の動乱期を経て、地縁・血縁的な結びつきを強め、国人や土豪、地侍と呼ばれる領主として村落を把握していたと思われる。室町時代に入ると、こうした人々は、越智・筒井・六角・北畠という外部勢力に対抗するため、伊賀国内の結束を固める必要性から「惣国」⁽⁶⁾を成立させている。そして、天文2年（1533）惣国を成立させた国人たちは、土塁や掘に囲まれた館や城を構築していくことになる。規模は小さいながら伊賀国には約600の中世城館が存在した。奥城寺遺跡周辺にも夷山城（12）、古郡氏館（15）、恩常寺城（20）、山之下城（21）などが所在する。有力な大名や伊勢国司の勢力が少ない地域であったと考えられる。

天正六年（1578）、北畠氏の養子となっていた織田信長の次男信雄は、伊賀国領土拡大の拠点として、木津川右岸で奥城寺遺跡より北へ約35kmにあたる丸山城（7）の築城を始めた。しかし伊賀の郷士たちは、結集して築城を阻止した。再度、北畠（織田）信雄は自ら軍勢を率いて伊賀国領土拡大をするが、伊賀の郷士たちは各地で抵抗し、北畠軍を撃破、伊勢へ敗走させた。この知らせを受けた織田信長は、天正九

年（1581）、甲賀口、信楽口、加太口、大和口の四方向から伊賀に侵攻して全土を平定した。このようにして、天正伊賀の乱は終焉を迎えた。

中世では、次のような遺跡がある。三石代遺跡（30）では、中世墓が検出されている。高賀遺跡では、平安時代後期から鎌倉時代にかけて、断続的に掘立柱建物が検出されており、内面に暗文が施された瓦器碗や土師器皿・杯などが出土している。浮田遺跡では、11世紀から13世紀にかけて盛行する掘立柱建物を中心とする遺構が検出されている。また、中世墓も検出されている。土師器皿・瓦器碗・青磁碗などが出土している。

（長谷川哲也）

【註】

- (1) 地理的環境については、下記の文献を参考にした。
 - ・三重県埋蔵文化財センター『城之越遺跡 三重県埋蔵文化財調査報告99-3』1992年
 - ・上野市教育委員会 上野市遺跡調査会『比土遺跡発掘報告 上野市文化財調査報告61』1997年
 - ・『三重県の地名』平凡社 1983年
- (2) 歴史的環境については以下の文献を参考にした。
 - ・『日本書紀』黒板勝美編『新訂増補國史体系 第一卷 下』吉川弘文館 1952年
 - 『續日本紀』黒板勝美編『新訂増補國史体系 第二卷』吉川弘文館 1935年
 - ・伊賀市『上野市史 考古編』2005年
 - ・福井健二『定本 三重の城』郷土出版 1991年
 - ・倉本一宏『壬申の乱を歩く』吉川弘文館 2007年
- (3) 上野市教育委員会文化課『上野市埋蔵文化財ニュース No.64』2001年
上野市教育委員会『1996年上野市埋蔵文化財年報3』1997年
上野市教育委員会『1996年上野市埋蔵文化財年報9』2003年
- (4) 山田猛『壬申の乱と古代伊賀の道』『上野市史考古編』伊賀市 2005年
- (5) (3) 参照
- (6) 村々がお互いに連携してつくりあげるまとまり

III 遺構

1 基本層序

調査地は、概ね南北方向に長い方形を呈している。標高は南側で約166.5m、北側で約164.7mであり、両側の段差約1.8mを有する地形で、現況は荒蕪地と水田であった。調査区南側の荒蕪地では、1層表土、2層旧耕作土、3層水田床土である。そして、これらを除去していくと4層黄色系粘質土、5・6層灰色砂質土であった。

6層の下は粗砂が多量に見られ、遺物を完全に含まない地山と判断した。5層から6層にかけては基本的な堆積状況ではなく、幾層かが流れ込んで堆積しており、これらの層が微高地を形成している。しかも東西の断面を比較してみると、南東から北西にかけて下傾斜している。当初は、瓦器等の土器が出土した4層中面を遺構検出面としていたが、5層中面から6層上面において、高杯・壺・壺が出土した。そこで、さらに約40cm下げて、6層上面を遺構検出面とした。荒蕪地において4層は中世、5層以下は古代以前の堆積土と考えられる。

北側の水田では、1層表土、2層旧表土、3層水田床土、4層黄色系粘質土、5・6層灰色系砂質土であった。表土直下約60~70cmの6層上面を遺構検出面とした。6層から下は中粒砂や粗砂を含んでおり、遺物を完全に含まない地山と判断した。川原の礫と思われる。6層からは瓦器・陶器などの土器が出土している。6層は中世の堆積土と考えられる。

2 中世の遺構

調査区南側の荒蕪地で流路1筋、調査区北側の水田で溝3条と土坑6基を検出した。包含層・表土にて瓦器碗や土釜など中世の遺物が出土している。検出面や出土遺物を考慮すると、すべて中世の遺構と考えられる。

〈流路〉

S D 1 調査区南側のi5~i7・j5~j8・k5~k8・l5~l8・m5~m9・n5~n10・o6~o8・o10区で検出された流路である。長さ約32m以上・幅約5mの二筋の流路

で、中州を形成している。方向としては、南東から北西であり、調査区の北を流れている木津川とはほぼ平行している。木津川はこれまで氾濫を繰り返しながら流路を変えている。その痕跡は、米軍が撮影した航空写真（昭和23年撮影）からも見てとれる（第3図）。出土遺物は、土師器壺（1）、高杯（2）、白磁碗（3）、土釜（4）、擂鉢（5）、土師器壺、綠釉陶器小片、瓦器小片、瓦質土器小片である。

〈土坑〉

S K 2 調査区北西側のd9区で検出された南北0.75m・東西0.7m・深さ0.08mの方形の土坑である。5層において、人頭大から拳大の礫石が23個出土した。当初、性格不明土坑としていたが、礫石の除去後、10cm程下げた所で遺構を確認した。出土遺物は、礫岩撤去作業中に出土した釘（6）、鉄滓、土製品と、遺構確認後の土師器小片である。なお、礫岩撤去作業中の遺物出土状況についての詳細は不明である。

S K 3 調査区南東側のk13区で検出された土坑である。長径1.2m・短径0.75m・深さ0.18mの浅い梢円形の土坑である。出土遺物はない。

S K 6 調査区北側のa11区で検出された土坑である。長径0.75m以上・短径0.5m・深さ0.06mの半円形の土坑である。調査区外北方向に延びているので、溝になる可能性もある。出土遺物は、土師器碗、瓦器小片である。

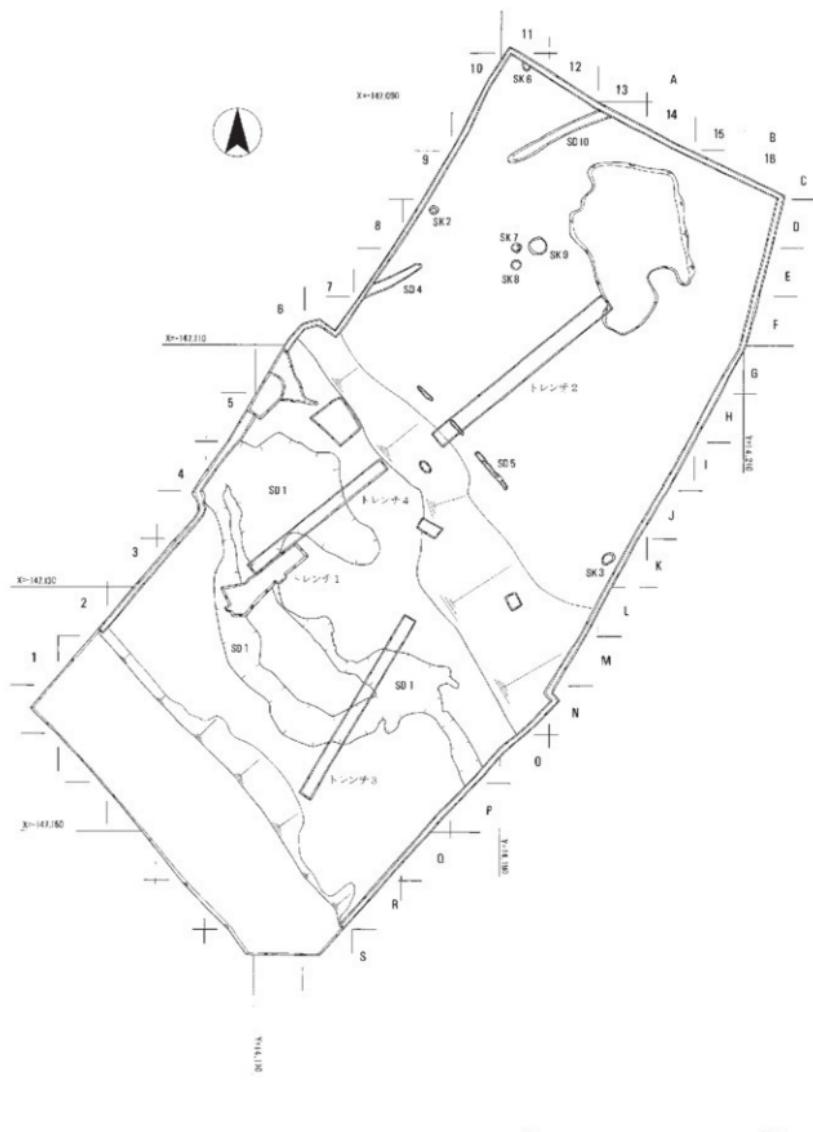
S K 7 調査区北側のd11・e11区で検出された土坑である。直径0.85m・深さ0.18mの小規模な円形の土坑である。出土遺物はない。

S K 8 調査区北側のe11区で検出された土坑である。直径0.8m・深さ0.15m小規模な円形の土坑である。出土遺物はない。

S K 9 調査区北側のd11・e11区で検出された土坑である。長径1.5m・短径1.5m・深さ0.12mの小規模な円形の土坑である。出土遺物は、土師器小片、瓦器碗（7）である。

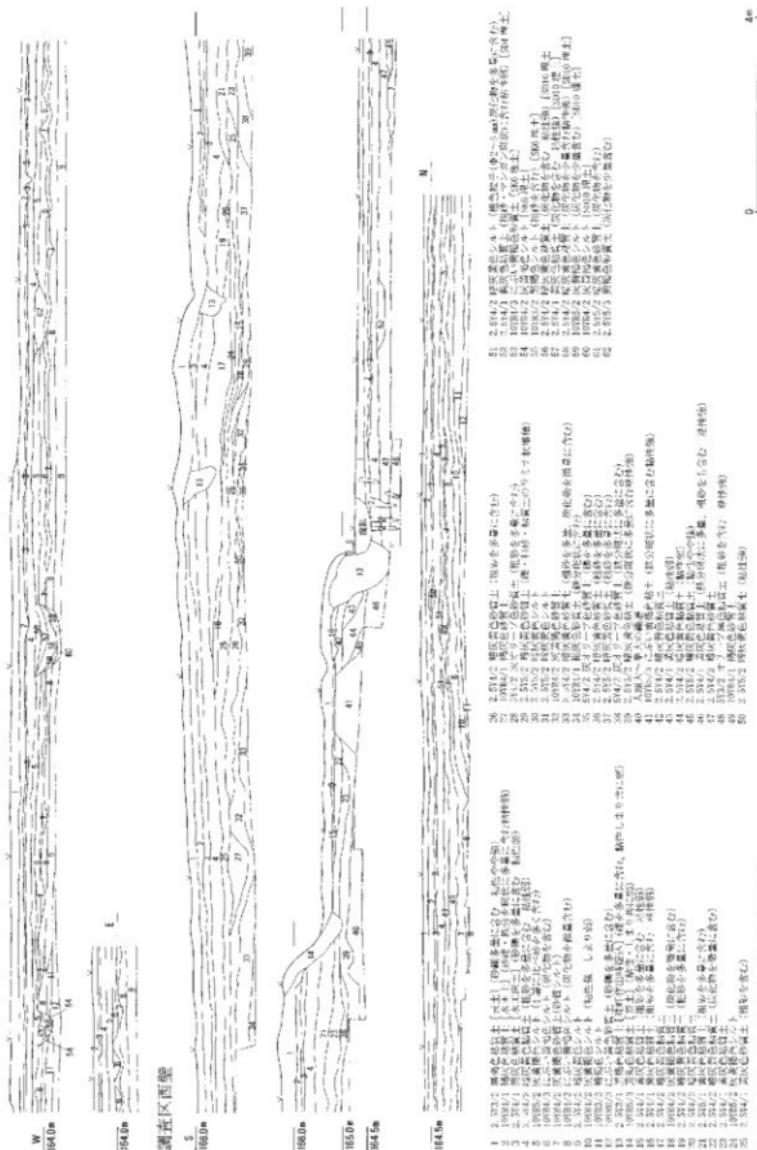
〈溝〉

S D 4 調査区西側e8・e9・f8区で検出された溝である。長さ4.8m以上・幅0.85m・深さ0.13mの溝であ



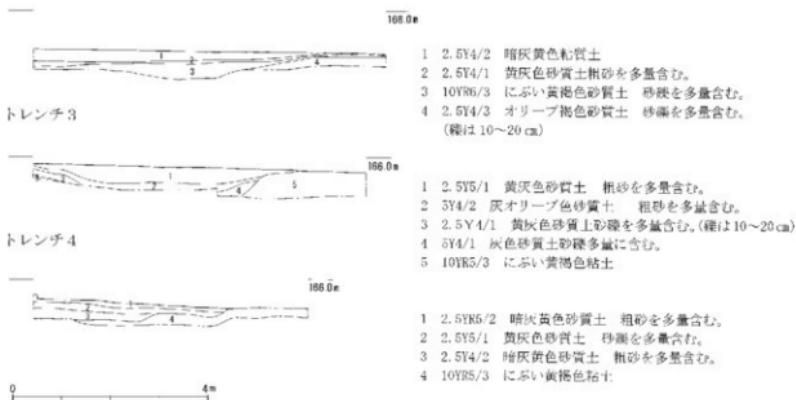
第4図 遺構平面図 (1:400)

卷之二



第5図 調査区北・西壁土層断面図(1:100)

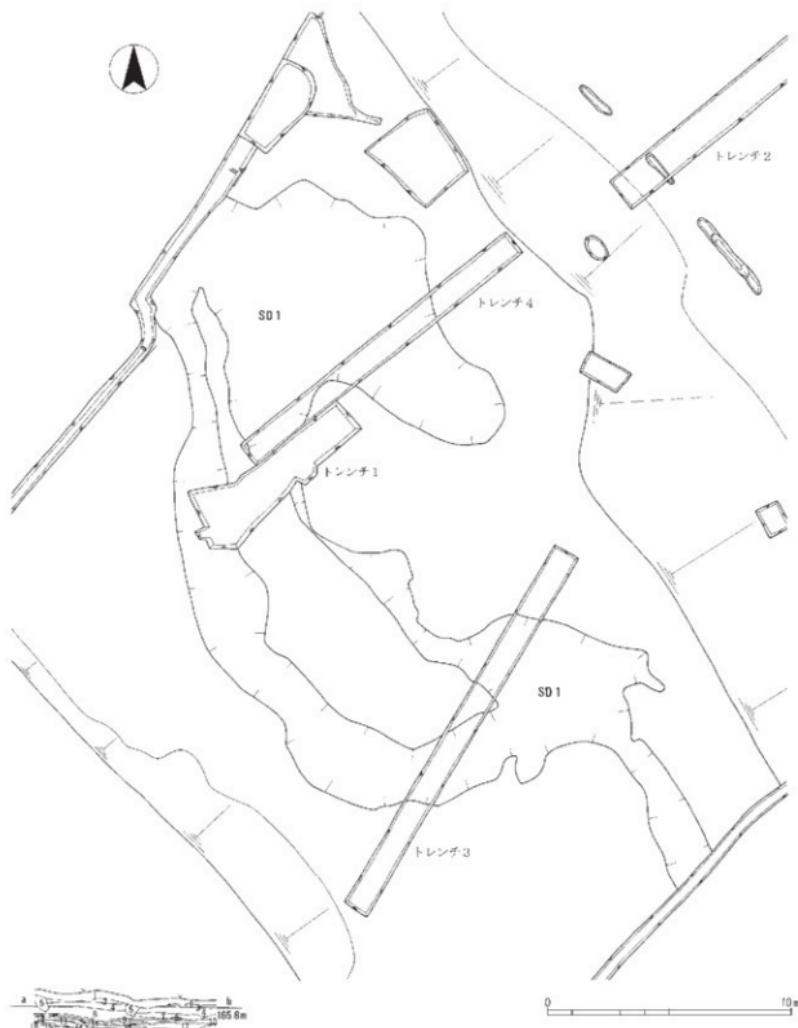
トレンチ2



第6図 調査区トレンチ土層断面図 (1:100)

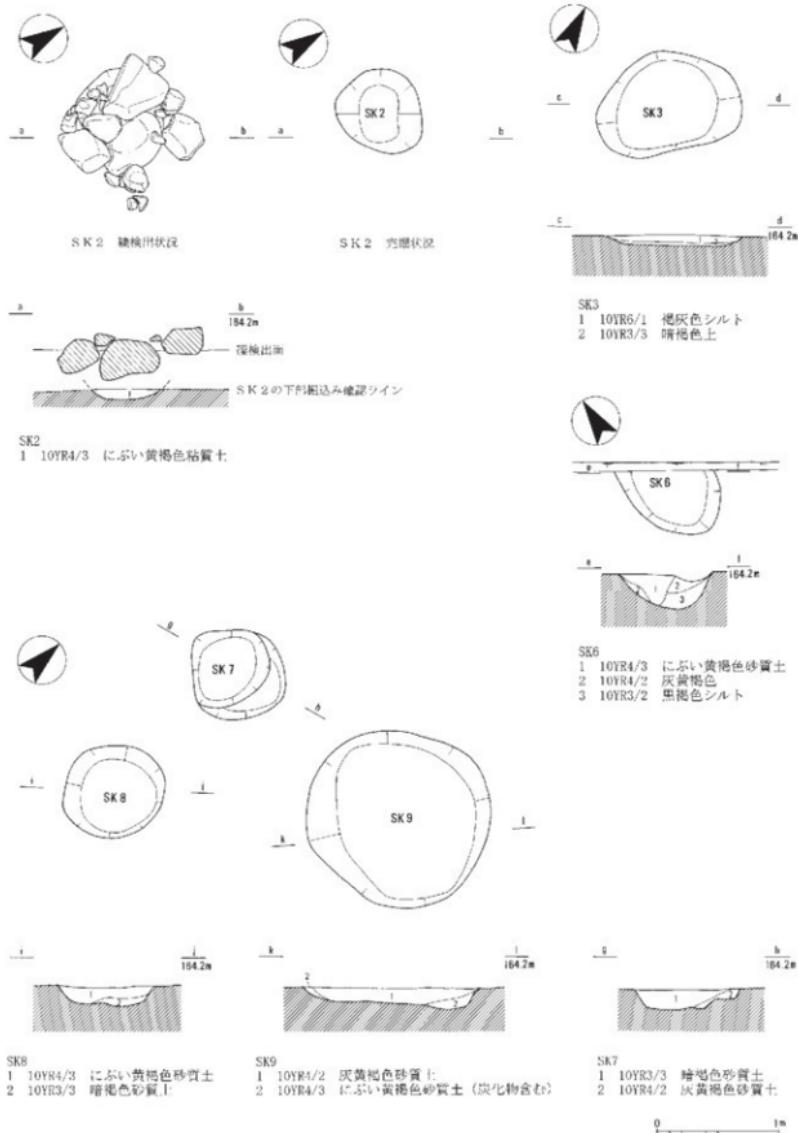
遺構番号	地区	規模			形状	時期	遺物
		長さ/長径(m)	幅/短径(m)	深さ(m)			
SD1	i5~i7 j5~j8 k5~k8 l5~l8 m5~m9 n5~n10 o6~o8 * o10	32	5	—	—	古墳～中世	甕、土師器甕、高杯 綠釉陶器、白磁 瓦器、瓦質土器插鉢
SK2	d9	1.2	1.1	0.44	方形	中世	土師椀小片、炭化物 釘1本、鉄滓、土製品
SK3	k13	1.2	0.75	0.18	橢円		
SD4	e8 * e9 * f8	4.8	0.85	0.13	隅丸方形		
SD5	g9 * h9 h10 * i10 i11	5.9	0.5	0.12	橢円		
SK6	a11	0.75	0.5	0.06	半円	中世	土師椀、瓦器の各小片
SK7	d11 * e11	0.85	0.85	0.18	円		
SK8	e11	0.8	0.8	0.15	円		
SK9	d11 * e11	1.5	1.5	0.12	円	中世	土師器、瓦器椀の各小片
SD10	b11~b13 c11	8.8	1	0.3	隅丸方形	中世	土器、瓦器、陶器の各小片

第2表 遺構一覧表

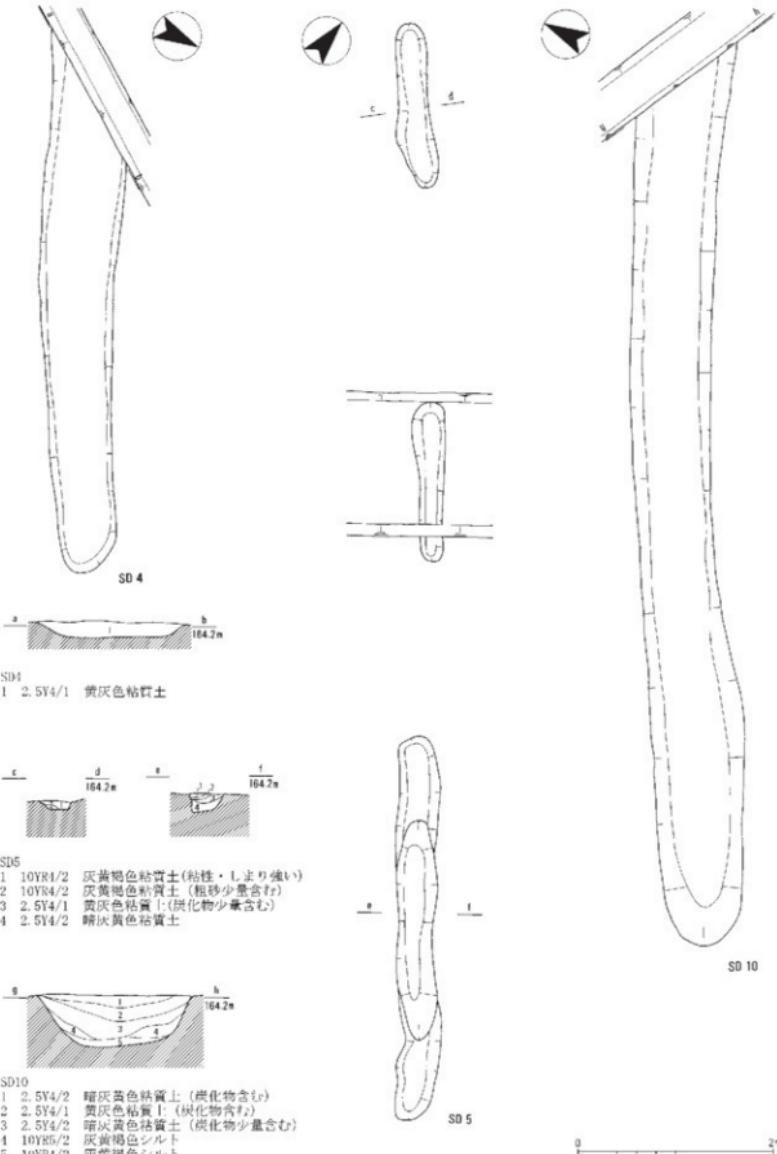


1 2.5Y3/2	黒褐色粘質土〔表土〕	10 2.5Y4/1	黄灰色砂質土〔粗砂含む〕
2 10Y4/1	褐灰色粘質土〔水田土〕	11 5Y4/2	灰オーリーブ色砂質土〔粗砂を多量に含む〕
3 2.5Y4/1	黄灰色粘質土〔水田末〔-〕〕	12 2.5Y5/2	暗灰黄色砂質土〔疊・粗砂・粘質土のラミナ状堆積〕
4 2.5Y4/2	暗灰黄色粘質土〔(粗砂多量に含む、粘性弱)〕	13 2.5Y5/2	暗灰黄色シルト
5 2.5Y3/1	黒褐色粘質土〔耕作作出時の掘込〕	14 10Y4/2	灰黃褐色砂質土
6 2.5Y4/2	暗灰黄色粘質土	15 5Y4/2	灰オーリーブ色砂質土〔疊を多量に含む〕
7 2.5Y4/2	暗灰黄色粘質土	16 2.5Y4/2	暗灰黄色砂質土〔粗砂を多量に含む〕
8 2.5Y4/2	暗灰黄色粘質土	17 2.5Y5/2	暗灰黄色砂質土〔粗砂を多量に含む〕
9 10Y5/2	灰黃褐色シルト〔SD1〕	18 2.5Y4/2	暗灰黄色砂質土〔粗砂を多量に含む〕

第7図 SD1平面図・断面図 (1:200)



第8図 SK2・3・6・7・8・9平面図・断面図 (1:40)



第9図 SD 4・5・10平面図・断面図 (1:50)

る。調査区外南西方向に延びている可能性がある。
出土遺物はない。

S D 5 調査区中央のg9・h9・h10・i10・i11区で検出された溝である。南北0.35m・東西1.7m・深さ0.12m、南北0.3m・東西1.6m・深さ0.13m、南北0.4m・東西2.5m・深さ0.24mの小規模な楕円形の溝である。発掘調査時点では、3条に分かれていたが、方向や形状から考えて一連の遺構である可能性が高い。

い。出土遺物はない。

S D 10 調査区北側のb11～b13・c11区で検出された溝である。長さ8.8m以上・幅1m・深さ0.3mの隅丸方形の溝である。調査区北壁に痕跡が見えていることから、北方向は調査区外に延びている。下層に礫を含む。埋土に混じるかたちで土師器、瓦器、陶器のそれぞれ小片が出土した。

(長谷川哲也)

IV 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱（コンテナパット）にして3箱である。中世の遺物が最も多いが、古墳時代の遺物も出土している。

S D 1 (1～5)

1は土師器壺である。屈曲した口縁部を持ち、口縁部は頸部から外へ伸びる。また口縁端部は5mm程の平坦面がある。古墳時代前期のものと思われる。

2は土師器高杯の脚柱部である。体部外面には貼り付け痕が見られる。古墳時代前期のものと思われる。

3は白磁碗である。口縁部を玉縁にしている。胎土は粗く、灰色気味の白色を呈している。12世紀中葉のものと思われる⁽³⁾。

4は土釜の小片である。体部内外面にヨコナデが施されている⁽⁴⁾。15世紀から16世紀頃のものと思われる。

5は擂鉢の小片である。15世紀後期から16世紀中期のものと思われる⁽⁵⁾。

S K 2 (6)

6は角釘である。残長5.1cmで、釘頭にはひとまわり大きい鋸が剥離した痕がある。

S K 9 (7)

7は瓦器椀である。口縁内面に沈線が施され、若干外反している。体部外面のミガキが粗く、12世紀後葉のものと思われる⁽⁶⁾。

包含層出土遺物 (8～35)

8は土師器壺である。口縁は大きく外反し、折り返して作られている。小芝道跡で1点同様のものが見られる⁽⁷⁾。しかし、奥城寺遺跡の周辺での類例は少なく、他地域の影響を受けた可能性が高い。古墳時

代前期のものと思われる。9は土師器壺の底部である。底径5.1cm、外面はオサエ・ナデが施されている。10は土師器壺の底部である。底径4.2cm、外面はオサエ・ナデが施されている。

11は土師器壺である。口径16cm、口縁外面はタテ方向のハケメがある。体部外面は全体的に粗いハケメが施されている。体部内面はヨコナデ。古墳時代前期のものと思われる。12は土師器壺の小片である。体部外面は、粗いハケメがあり、内面はナデ。古墳時代前期のものと思われる。

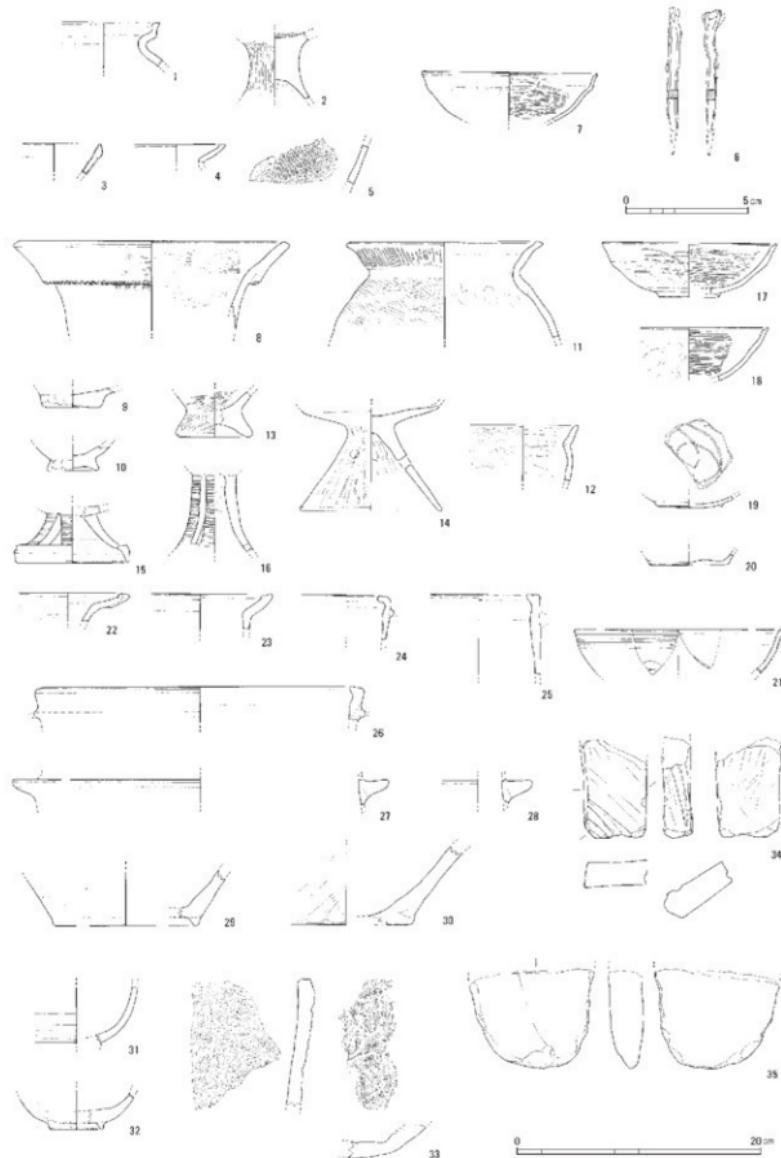
13は土師器鉢の底部である。底径は6.2cm、外面はミガキ・ナデが施されている。

14は土師器高杯の脚柱部である。底径11.6cmで、径0.8cmの三方透孔がみられる。古墳時代前期のものと思われる。

15は須恵器高杯である。底径9.2cm・基部径4.0cm、体部外面にカキメが見られる。古墳時代中期のものと思われる。16は須恵器高杯である。長脚で、基部径3.6cm、体部外面にカキメが見られる。古墳時代後期から飛鳥時代のものと思われる。

17～19は瓦器椀である。17は、口径14.2cm・器高4.4cm・高台径4.8cmである。口縁内面に沈線が施され、若干外反している。体部外面はミガキが粗く、内面は連結輪状と思われる暗文が施されている。18も、体部外面のミガキが粗い。また口縁内面に沈線が施され、若干外反している。19は、高台径5.3cmである。内面は連結輪状の暗文が施されている。17から19はいずれも12世紀後葉のものと思われる。

20は土師器皿の底部である。底径は6.4cm、内面は若干凸凹のあるナデ、外面はオサエ・ナデが施され



第10図 出土遺物実測図 (1:4 但し鉄製品は1:2)

ている。

21は青磁碗である。口縁部に片切形の凹線が4筋施されている。14世紀頃のものと思われる⁽⁷⁾。

22~28は瓦質土器である。22・23・25・26は土釜の口縁部である。23は口縁が内側に折り曲げられており、内外面はヨコナデが施されている。貼付け痕がある。25は口縁は内側に折り曲げられている。外面はナデが施され、煤が付着しており、鈎の貼付け痕が見られる。断面も黒色を呈し、煙しが不良である。26は、口縁部が「く」字形に外傾しており、口縁部端部を内側に肥厚させている。内外面とも、ナデが施されている。24・27・28は羽釜である。24は口縁は内側に折り曲げられており、内外面はヨコナデが施されている。貼付け痕がある。27は羽釜の鈎部で、鈎径は30.8cmである。外面はヨコナデが施されており、貼付け痕がある。28も羽釜鈎部の小片である。外面はナデが施され、貼付け痕も明瞭である。22~28はいずれも15~16世紀頃のものと考えられる。

29は陶器の鉢である。高台径は11.8cm、高台は三角形で、貼付け痕跡が明瞭である。体部外面にロクロナデとケズリが施されている。また、内面は摩滅しており使用痕が認められる。

30は陶器壺の底部と思われる。内外面とともに、ナデが施されている。

31・32は陶器丸碗である⁽⁸⁾。31は、外面はロクロケズリがあり、内外面とも釉が施されている。また、高台に糸切痕が見られる。18世紀頃のものと考えら

れる。32は高台径4.4cm、高台に貼付痕が見られる。外面はロクロケズリがあり、内外面とも釉が施されている。17世紀から18世紀頃にかけてのものと思われる。

33は平瓦である。外面はナデ、内面は布目痕が認められる。

34・35は砥石である。34は残存長8.2cm・厚さ2.3cmである。両面に使用痕が見られる。35は残長8.1cm、厚さ2.7cmである⁽⁹⁾。

(前野謙一)

【註】

- (1) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」(『文化財論叢』奈良文化財研究所 1983年)
- (2) 山田猛「下郡遺跡群出土の擂鉢」(『Mie history vol.1』三重歴史文化研究会 1990年)
- (3) 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館 1978年)
- (4) 福田典明「伊賀地域における瓦器に関する覚書」(『中近世土器の基礎研究XX』日本中世土器研究会 2006年)
- (5) 上野市教育委員会「小芝遺跡発掘調査報告」1993年
- (6) 濱戸市埋蔵文化財センター「江戸時代の濱戸窯」2002年
- (7) 上田秀夫「14~16世紀の青磁碗の分類」(『貿易陶磁研究第2号』日本貿易陶磁研究会1982年)
- (8) 石材については、奥義次氏に実見の上、ご指導をいただいた。

遺物番号	実測番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)	胎土	色調	残存率	備考
1	005-01	SD1	土師器	甕		密、～0.5mm砂粒と 雲母含	外：灰褐色5YR6/2 内：に赤い黄橙灰7.5YR7/3		焼付着
2	005-06	SD1	土師器	高杯	脚柱状部 4.0	密、～1mm砂粒と 雲母含	外：に赤い黄橙灰10YR7/2 内：灰白NR4/0		
3	005-03	SD1	磁器	白磁碗		密	輪：灰7.5Y7/1 素地：灰白NR8/0		
4	005-02	SD1	瓦質土器	土釜		密、雲母含	灰N5/0		
5	005-05	SD1	陶器	擂鉢		密、～0.5mm砂粒と 雲母含	外：黄灰2.5Y4/1 内：灰白NR4/0		
6	007-01	SK2	鉄製品	角釘	残存長 5.1			11/12	重量2.08g
7	005-04	SK9	瓦器	楕	復元口径 14.4	密、雲母含	灰N5/0		
8	006-01	包含層	土師器	甕	口径 22.6	密、～3.5mm砂粒と 雲母含	外：褐灰7.5YR6/1 内：に赤い黄橙10YR7/3	3/12	
9	001-01	包含層	土師器	甕	底径 5.1	密、微砂粒と雲母含	外：に赤い黄橙灰10YR7/2 内：に赤い相5YR7/4	8/12	
10	001-02	包含層	土師器	甕	底径 4.2	密、～1mm砂粒含	外：褐灰7.5YR6/1 内：灰白10YR8/1	3/12	
11	005-07	包含層	土師器	甕	口径 16	密、～0.5mm砂粒と 雲母含	外：に赤い櫻5YR6/4 内：相2.5YR6/6	3/12	
12	002-01	包含層	土師器	甕		密、～1mm砂粒含	浅黄2.5Y7/3	1/12	
13	003-01	包含層	土師器	鉢		密、～2mm砂粒含	に赤い縁7.5YR6/4	5/12	
14	006-02	包含層	土師器	高杯	底径 11.6 径 0.8	密、～1mm砂粒と 雲母含	櫻5YR6/6	4/12	三方透孔、摩滅痕 しぼりあり
15	002-04	包含層	須弥器	高杯	底径 9.2 基部径4.0	密、～1.5mm砂粒含	灰N5/0	3/12	三方透孔
16	002-03	包含層	須弥器	高杯		密、～1mm砂粒含	灰褐色5YR6/2	3/12	三方透孔
17	002-05	包含層	瓦器	楕	口径 14.2 器高 4.4 高台径 4.8	密、微砂粒含	灰N4/0	2/12	
18	002-06	包含層	瓦器	楕		密、微砂粒含	灰N4/0	1/12	
19	002-07	包含層	瓦器	楕		密、微砂粒含	暗灰N3/0	5/12	内面に暗文
20	001-03	包含層	土師器	直	底径 6.4	密	浅黄褐色10YR8/4	8/12	
21	003-04	包含層	磁器	青磁碗	口径 約17	密、微砂粒含	輪：灰白NR8/0 素地：明オリーブ灰5Y7/1	1/12	
22	001-05	包含層	瓦質土器	土釜		密、雲母含	外：灰N5/0 内：灰白NR8/0		摩滅痕あり
23	003-03	包含層	瓦質土器	土釜		密、～1mm砂粒含	暗灰N3/0	1/12	
24	001-09	包含層	瓦質土器	羽釜		密、～1mm砂粒と 雲母含	外：暗灰N3/0 内：灰N5/0		
25	001-10	包含層	瓦質土器	土釜		密、～0.5mm砂粒と 雲母含	外：暗灰N3/0 内：灰白NR4/0		焼付着
26	003-02	包含層	瓦質土器	土釜	口径 26.8	密、～1mm砂粒含	灰5Y4/1	2/12	
27	001-08	包含層	瓦質土器	羽釜	脚径 30.8	密、～0.5mm砂粒と 雲母含	外：暗灰N3/0 内：灰N5/0	1/12	
28	001-07	包含層	瓦質土器	羽釜		密、～1.5mm砂粒と 雲母含	外：暗灰N3/0 内：灰N5/0		
29	002-02	包含層	陶器	鉢	高台径 約11.8	密、～2mm砂粒含	灰白5Y7/1	1/12	
30	001-04	包含層	陶器	甕		密	赤2.5YR6/1 内：褐5.5YR5/1		常滑
31	003-05	包含層	陶器	丸楕		密、～1mm砂粒含	素地：灰白5Y7/1 輪：灰5Y8/1	1/12	
32	003-06	包含層	陶器	丸楕	高台径 4.4	密、～1mm砂粒含	灰白5Y8/1	4/12	
33	004-01	包含層	瓦	平瓦		密、～2mm砂粒含	灰N5/0		布目痕
34	004-02	包含層	石製品	砥石	残存長 8.2				重量140 g
35	006-03	包含層	石製品	砥石	残存長 8.1				重量350 g

第3表 遺物観察表

V 結 語

1 古墳時代の遺物について

古墳時代前期の遺物として8の土師器壺、1・11・12の土師器壺、2・14の土師器高杯が出土した。中期の遺物として15の須恵器高杯、後期から飛鳥時代にかけては、16の須恵器高杯が出土した。すべて、調査区南側の荒蕪地からの出土である。8の土師器壺と同様のものは、奥城寺遺跡より北に4.5kmにある小芝遺跡で1点出土している⁽¹⁾。口縁が外反し折り返しの特徴があり、伊賀盆地より東側である東海地方との類縁を辿れる可能性があると思われる。しかしそれ以外については、城之越遺跡⁽²⁾や高賀遺跡⁽³⁾など、奥城寺遺跡周辺の古墳時代一般に通じるものと考えられ、近畿地方との類縁関係を辿れる土器である。奥城寺遺跡の古墳時代の遺物は少量であるが、基本的には、木津川の周辺遺跡と同様の傾向にあてはまるといえる。

2 中・近世の遺物について

中・近世の遺物を分類すると、12世紀後半から13世紀、15世紀から16世紀頃、近世の3つに分類することができる。

12世紀後半から13世紀の遺物は、主に瓦器椀である。7・17・18・19の瓦器椀はすべてこの時期にあてはまる⁽⁴⁾。その他3の白磁椀⁽⁵⁾、29の陶器鉢は、この時期に該当するものである。

15世紀から16世紀頃の遺物は、主に土釜、羽釜である。4・23・25・26の土釜と、24・27・28の羽釜はすべてこの時期にあてはまる⁽⁶⁾。その他5の擂鉢⁽⁷⁾はこの時期に該当するものである。

奥城寺遺跡北側に位置する高賀遺跡、浮田遺跡においては、12世紀後半の遺構・遺物が確認されている。奥城寺遺跡南側に位置する比土遺跡⁽⁸⁾において、15世紀から16世紀の遺構・遺物が確認されている。基本的には、木津川左岸の遺跡と同時期にあてはまり、氾濫源に位置する奥城寺遺跡に流れ込んだものと思われる。

近世の遺物は31・32の陶器椀2点のみである。包

含層からの出土遺物であるので、木津川の氾濫等による混入のものと考えてよいだろう。

3 S D 1 の埋没期について

昭和23年に撮影された奥城寺遺跡周辺の航空写真を観察してみると、木津川もしくは木津川支流の痕跡が見てとれる。その痕跡の1つとして、比土集落の中央より西寄りに流れた後、現在の近鉄大阪線の伊賀神戸駅付近で北上し、今回の奥城寺遺跡調査地を嶺断した後、河岸段丘（朝日ヶ丘団地）に沿って東方向に流れ、再び北東に進路を変えて、現在の木津川に合流している。

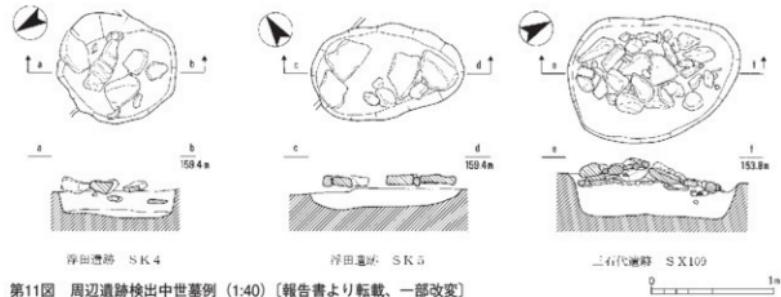
今回の発掘調査で検出されたS D 1は、軸を南北方向にもち、現在の木津川とは平行している。しかも南東から北西へ下傾斜している。このように木津川は氾濫を繰り返す中で、河道を変更しながら現在に至っていることが窺える。奥城寺遺跡発掘調査から考慮すると、S D 1は遅くとも16世紀後半には埋没し、その後木津川の氾濫源の一部となったと考えられる。近世以降に現在の地形に近い状態に落ち着き、更に昭和23年までには段丘にそった耕作地となつた。

4 S K 2 と周辺遺跡の中世墓

木津川上流の奥城寺遺跡周辺において、中世墓と示唆されているものは、第4表奥城寺遺跡周辺の中世墓を参照されたい⁽⁹⁾。そのうち石を伴う中世墓は浮田遺跡のS K 4・5・6・7と三石代遺跡のS X 109の5例がある。いずれも木津川の左岸に位置する。浮田遺跡のS K 4・5は、石が蓋をするかのような形で検出された。また、三石代遺跡S X 109は、配石墓として検出された。奥城寺遺跡のS K 2は、三石代遺跡のS X 109と石の検出状況が類似している。しかしS K 2を中世墓とする確証がない。今後の調査によって、木津川周辺の中世墓が解明されることが期待される。

遺跡名	遺構番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	遺物(個)	時代	調査所見
浮田遺跡 (平成元年 調査区)	S K 9	90以上	70	20~40	隅丸方形	土師器皿3 土師器皿14	11世紀代	11世紀後半 のものと、 13世紀中頃 のものがある。 13世紀 中期のものは、 近接して位置する。 遺物は正位で出土したものが多いく。
	S K 26	100	75	20	楕円形	瓦器陶2 瓦器皿1 土師器皿1	11世紀後半	
	S K 46	80	—	40	長楕円形	瓦器陶2 瓦器皿4	13世紀前半	
	S K 50	110	70	40	楕円形	瓦器陶2 瓦器皿2 瓦質陶2	13世紀中葉	
	S K 55	130	70	50	隅丸長方形	ミニコマユア羽釜1 瓦器陶2 土師器皿1	13世紀後半	
	S K 57	120	70	30	不整円形	瓦器陶2	13世紀中葉	
浮田遺跡 (平成2年 調査区)	S K 2	100	50	10	長円形	土師器皿3 青磁皿1	鎌倉時代	12世紀中頃 と12世紀末 から13世紀 初である。 遺物は正位で出土したものが多いく。
	S K 3	100	60	7	長円形	土師器皿1	鎌倉時代	
	S K 4	100	90	16~22	楕円形	土師器皿2 土師器皿2 石5(20~40cm)	鎌倉時代	
	S K 5	125	80	10~14	長円形	石4(25~35cm)	鎌倉時代	
	S K 6	150	80	20	長円形	土師器皿1 瓦器皿2 石9(10~30cm)	鎌倉時代	
	S K 7	80	80	14	隅丸正方形	瓦器皿1 石2(8cm程)	鎌倉時代	
	S K 8	175	100	30	卵形	瓦器小片	鎌倉時代	
	S X 109	140	100	40	長円形	瓦器陶1 石50程(20cm程)	中世	
三三代遺跡	S X 114	210	110	20	略方形	瓦器陶1	中世	12世紀頃
	S X 117	320	140~190	—	略方形	瓦器陶2 土師器皿1	中世	
	S X 118	280以上	140	—	略方形	瓦器陶5	中世	
奥城寺遺跡	S K 2	75	70	8	不整円形	針1、土師器小片 石22(8~60cm程)	中世	
西方寺 中世墓群	上戸戸集落の西方の標高210mの独立丘陵に位置する。 西方寺に併設して営まれたと考えられる。							
稻田遺跡	木津川右岸の冲積地、比上盆地の中央に位置する。 中世墓と思われるものは、1辺3mの配石がみられた方形土坑である。							

第4表 奥城寺遺跡周辺の中世墓



第11図 周辺遺跡検出中世墓例 (1:40) [報告書より転載、一部改変]

5 中世の遺構について

奥城寺遺跡は、S D 1 の埋没期が遅くとも16世紀後半であり、その他の遺構もすべて中世である。奥城遺跡周辺の中世の遺跡は、浮田遺跡、高賀遺跡、比土遺跡の3遺跡が挙げられる⁽¹⁾。いずれも木津川左岸に位置する。調査区より北約2kmに位置する浮田遺跡では、瓦器を含まない10世紀～11世紀前半の掘立柱建物4棟、古相の瓦器を伴う11世紀後半から12世紀の掘立柱建物が3棟、新相の瓦器を伴う13世紀の掘立柱建物が2棟が検出されており、断続した集落遺跡として注目されている。調査区より北東約1kmする高賀遺跡は、12世紀から13世紀にかけての掘立柱建物が6棟検出されている。遺物としては、奥城寺遺跡と同時期である12世紀後半の瓦器焼が出土している。また、調査区より南に約500mの比土遺跡では、14世紀半ばから15世紀前半にかけて城館跡が検出されている。遺物には、奥城寺遺跡と類似した砥石・陶器鉢などがあり、廃絶期は16世紀後半とされている。

以上のことと、奥城寺遺跡出土遺物から考察すれば、以下のことが指摘できるだろう。12世紀後半から13世紀において、奥城寺遺跡より北西に位置する遺跡と関連を示す出土遺物がある。また15世紀から16世紀において、奥城寺遺跡より南に位置する遺跡と関連性を示す出土遺物がある。今回の調査区は段丘下にあり、それぞれの時期の木津川の氾濫・流れ込みが原因と思われる。今回の調査により、奥城寺遺跡の遺物が中世のある時期にまとまって出土していることが確認できた。

今後の発掘調査により、更に木津川流域の様子が解明されることを期待する。

(前野謙一)

【註】

- (1) 上野市教育委員会『小芝遺跡発掘調査報告』1993年
- (2) 三重県埋蔵文化財センター『城之越遺跡』1992年
- (3) 三重県埋蔵文化財センター『平成2年度農業基盤整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告—第3分冊一』1991年
- (4) 福田典明「伊賀地域における瓦器に関する観察」(『中近世土器の基礎研究XX』日本中世土器研究会 2006年)
- (5) 横田賢次郎・森勉「太宰府出土の中国陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館 1978年)
- (6) 山田猛「下都遺跡群出土の描鉢」(『Mie history vol.1』三重歴史文化研究会 1990年)
- (7) 上田秀夫「14～16世紀の青磁楕の分類」(『貿易陶磁研究2号』日本貿易陶磁研究会1982年)
- (8) 上野市教育委員会・上野市遺跡調査会『比土遺跡発掘調査報告』1997年
- (9) 表4は次の文献を参考にした。
中世墓資料集成研究会『中世墓資料集成－中部・東海編－』2005年、三重県埋蔵文化財センター『三石遺跡発掘調査報告』2007年、三重県埋蔵文化財センター『平成元年度農業基盤整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告—第1分冊一』1990年、前註(3)
- (10) 前註(3)・(8)に同じ

写 真 図 版



調査区全景（南から）



S D 1 (東から)

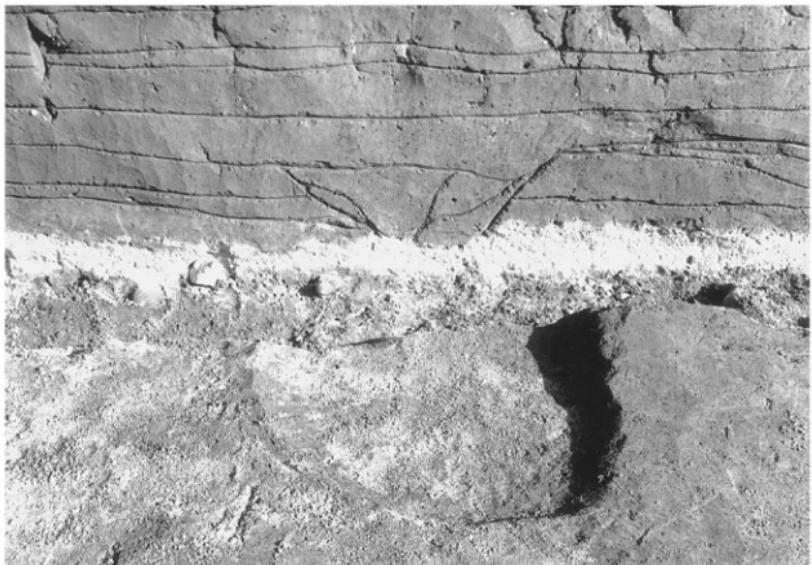
写真図版 2



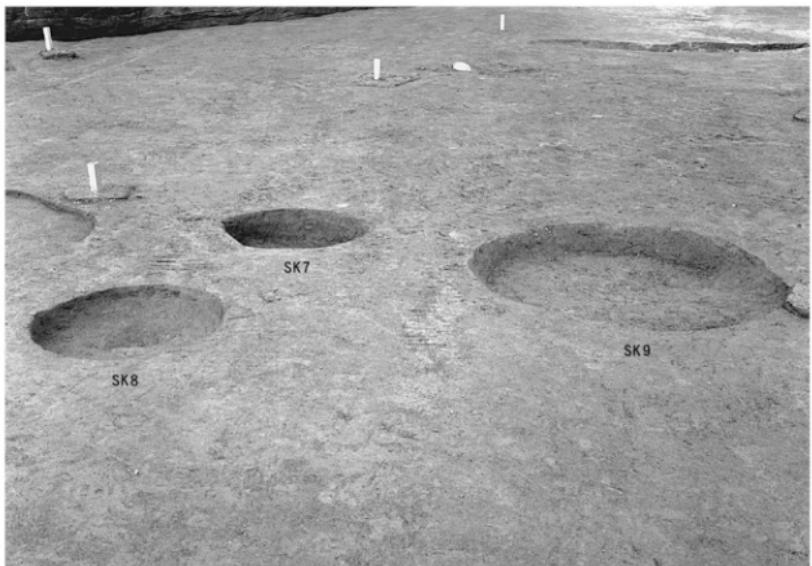
S K 2 (東から)



S K 2 堀込完掘状況 (東から)



SK 6 完掘状況（南から）



SK 7・8・9 完掘状況（東から）

写真図版 4



SD 10 完掘状況（南から）



作業風景（南から）



SD 4 完掘状況（北から）



トレンチ 2 挖削状況（北から）



トレンチ 4 挖削状況（南から）

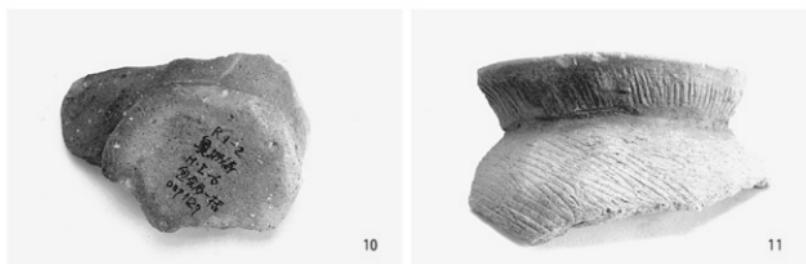
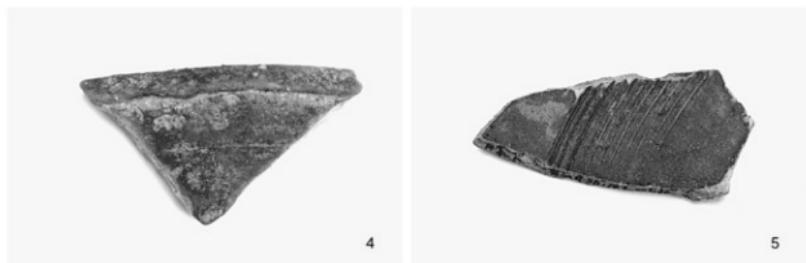
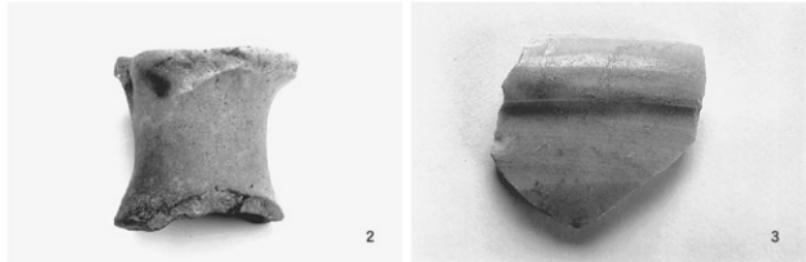


調査区全景（南から）



現在の奥城寺遺跡

写真図版 6

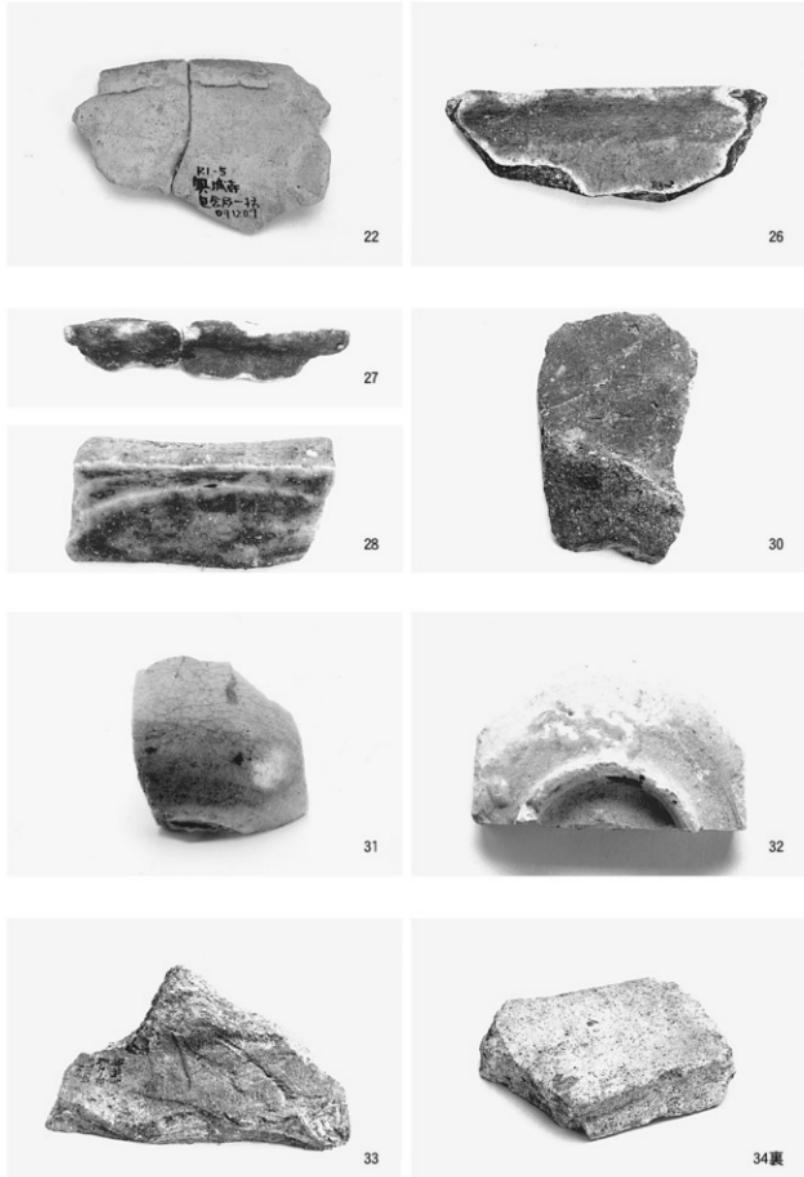


出土遺物①



出土遺物②

写真図版 8



出土遺物③

報 告 書 抄 錄

三重県埋蔵文化財調査報告302

おんじょう じ いせき
奥城寺遺跡発掘調査報告

2009（平成21）年2月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 （有）山 文 印 刷
